

---

# 神様のおもちゃ箱

仁科治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様のおもちや箱

### 【コード】

N1440L

### 【作者名】

仁科治

### 【あらすじ】

私は強い悪意を感じながら、この手紙を読み始めた。事実、復讐であろうことは後で分かった。

## ? 手紙 1 差出人不明の手紙

### ? 手紙

#### 1 差出人不明の手紙

最近、私のところに差出人名と所在地のない手紙が届くようになった。

最初に来た手紙の文面に、「俺たちはなんのために生きてきたのか。まったく無意味だった。もうすぐ六〇年になる。しかし、あなたはぬくぬくと生きている」と書かれ、日記ふうな話が続いていた。消印は私の住んでいる地域の郵便局名になっている。

その日、強い雨が降っていたので、その雨滴で差出人の名前が消えたのかもしれないと思った。しかし、考えてみれば、住所まで消えるわけがない。書き忘れたのだろうと、それ以上考えなかった。

二度目に来たとき、「僕の名は明かさない。知りたければ、あなたが何をしてきたかを思い出すだけだ」と断りがあって、ある意図のもとに名前が書かれていないことが確認できた。

私は強い悪意を感じながら、この手紙を読み始めた。事実、復讐であろうことは後で分かった。

#### > 最初の手紙 1 <

膝に痛みが走った。

電信柱の陰に隠れていたはずなのに、跳ね返った小石があたったのだ。父の手から放たれたものだ。

父を見た。僕の様子を窺っていた。

膝を見た。赤くなつた肌の中心が青白くなっていた。僕は膝を抱えて泣くふりをした。顔をしかめっていると、涙が出てきた。

父のほうをもう一度見ると、姿はなかった。

学校から帰ると、家の中が険しい雰囲気になっていた。祖母と父の間に争いがあったらしい。

祖母の激しいことばが父の背に向けられた。父はそのまま玄関を出て行った。母がいたかどうか覚えていない。

僕は、父の後をつけていった。そうすることが、みんなのために僕らの家のためになると思った。それと、もしかしたら、父はそれで僕のために戻ってくれるかもしれないと思った。

その父は、後をつけていく僕を石で威嚇した。手を大きく振って帰れという仕草を何度もした。そして、父は石をつかんだ。

父の手を離れた石が僕の膝で跳ね返ったのだ。

なぜ、いまごろこんなことを思い出すのだろう。五〇年近くも前になることだ。

父とは、三〇年は会っていない。母とはそれ以上になる。

父は、いま義母と一緒に暮らしており、妻がやっている盆と暮れの物のやりとりでつながりがあるだけだ。それだけで、僕は父の声も聞いていない。

小石の事件はそのことがあったことすら忘れていたのだから、僕にはそのときはたいしたことではなかったはずだ。

このとき、父は何歳であったのか。いまの僕よりずっと若いはずだ。僕が小学校へ上がったばかりのころだった。

何日かした後、小学校の帰り道の上り坂で母が僕を待っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1440/>

---

神様のおもちゃ箱

2010年10月17日09時19分発行